

幼児期の子どもを持つ母親への配偶者の心理的サポートが 育児と子どもの問題行動に及ぼす影響

立元 真¹ 福島裕子^{2,3} 松原耕平³

**The Effects of Psychosocial Support for the Parenting Skills,
Stress and Behavior of preschool Children**

Shin TATSUMOTO, Hiroko FUKUSHIMA, Kohei MATSUBARA

母親のストレス症状が高ければ、母親の養育行動が不適切なものになりがちになる。また、母親の養育行動が不適切であれば、その結果として子どもの問題行動が高まることが多い。これら2つの因果関係は、一般によく指摘される。

三結 (2008) は、父親と母親の育児不安と養育スキルとの間の因果関係を示している。この研究の中で、母親は、育児不安が高いと「感情的叱責」や「身体的攻撃」などのネガティブな養育スキルの使用が多くなり、逆に、「注目・関与」や「援助的コミュニケーション」といったポジティブな養育スキルの使用が少なくなることが示された。また、立元・坂田 (2008) は、母親の、養育スキル尺度の下位因子とストレス反応との間の関係を示し、例えば、「抑うつ」、「不安」、「不機嫌」、「怒り」、「自信喪失」、「不信」、「絶望」、「思考力低下」、「無気力」といった母親のストレス症状が高いと「罰スキル」の使用が多くなること、また、これらのストレス反応が低い母親は「関心スキル」が高く、同様に、いくつかのストレス症状が低い母親は、「援助的な言葉かけスキル」や「コミュニケーションスキル」といったポジティブな養育スキルの使用が多いことを示している。このように母親の育児不安やストレス反応は、自身の養育行動に影響を及ぼすことが示されている。さらに、罰スキルや一貫性のない養育スキルなどの不適切な養育スキルは、子どもの問題行動傾向に影響を及ぼす (佐藤・立元・坂田・岡安・佐藤, 2001)。

他方で、一般に母親のストレス反応育児不安は、父親による育児参加やソーシャルサポートによって緩和されることを指摘する研究は多い (加藤・小林, 2001; 高橋・園田, 2008など)。しかし、父親からのソーシャルサポートが子どもの行動傾向に及ぼす影響を示す研究は少ない。幼児期の子どもの場合、概して、母親の及ぼす影響が大きいことが予想され、父親からのソーシャルサポートや育児参加は母親を経由した間接的な要因とみなされるためであると考えられる。

¹ 宮崎大学教育文化学部

² 宮崎大学教育文化学部附属幼稚園

³ 宮崎大学大学院教育学研究科院生

その一方で、先行している海外のペアレントトレーニングの研究は、父親と母親間の関係改善や、父親や他の身近な存在や支援機関からのサポートを得やすくするための追加介入の効果の検討も始めている (Plant & Sanders, 2007)。これらの追加介入を従来のペアレントトレーニングに加えることが介入効果を持つのか否かについては、まだ議論を待たねばならない。母親が父親からのソーシャルサポートを得ることが子どもの行動傾向に大きく影響するならば、ペアレントトレーニングに追加介入を含めることが大きな意味をもつであろうし、そうでないならば、追加介入は必要に応じて選択されるべきであろう。

本研究は、母親への配偶者からのソーシャルサポートが、母親自身の養育行動、ストレス反応、子どもの問題行動にどのように影響するのかを検討し、今後の母親への養育スキル介入 (ペアレントトレーニング) にソーシャルサポートに関する追加介入を含めることの意義を検討するための資料を得ることを目的とする。

【方法】

調査対象

養育スキル、ストレス反応、ソーシャルサポートに関する質問については、宮崎県内の13ヶ所の保育園 (393名) および4つの幼稚園 (314名) における、29~81ヶ月の子どもをもつ母親707名を対象とした。このうち、男児の母親が342名、女児の母親が362名、男児と女児双方の幼児をもつ母親が3名であった。子どもの月齢は平均62.20ヶ月 (SD = 11.15) であった。なお、母親の年齢については回答を求めなかった。

子どもの問題行動傾向については、上記の17園の保育者51名に評定を求めた。

調査材料

養育スキル尺度 母親の具体的な養育行動を調べるために、立元・坂田 (2008) の、幼児期の子どもを持つ母親用の養育スキル尺度を用いた。この養育スキル尺度は、ポジティブな養育スキルとしての援助的な言葉かけスキル (5項目)、コミュニケーションスキル (3項目)、関心スキル (3項目)、制限スキル (3項目)、さらにネガティブな養育スキルとしての罰スキル (7項目) と一貫性のないしつけスキル (6項目) からなる。この尺度は、内的一貫性及び、GP分析による信頼性が確認されている。各項目について、普段の行動の頻度を4段階 (1 = まったくそうではない, 2 = あまりそうではない, 3 = ときどきそうである, 4 = いつもそうである) で自己評定するよう求めた。

心理的ストレス反応尺度 母親の心理的ストレス反応を調べるために、新名・坂田・矢富・本間 (1990) によって作成された53項目から成る心理的ストレス反応尺度を用いた。この尺度は、情動的ストレス反応を測定する4下位尺度計26項目 (抑うつ気分8項目、不安8項目、不機嫌5項目、怒り5項目)、および認知・行動的ストレス反応を測定する9下位尺度計27項目 (自信喪失、不信、絶望、心配、思考力低下、非現実的願望、無気力、引きこもり、焦燥、それぞれ3項目) によって構成されている。各項目について、最近の状態を4段階 (1 = あてはまらない, 2 = あまりあてはまらない, 3 = 少しあてはまる, 4 = あてはまる) で自己評定するよう求めた。

ソーシャルサポート尺度 母親が配偶者に対して知覚しているソーシャルサポートを調べるために、久田・千田・箕口 (1989) によって作成されたソーシャルサポート尺度16項目の中から、情緒的サポートと実体的サポートを測定するための項目を各3項目、計6項目選定した。各項目

目について、配偶者に対する普段の感じ方を4段階（1 = きっとちがう、2 = たぶんちがう、3 = たぶんそうだ、4 = きっとそうだ）で自己評定するよう求めた。

【結果と考察】

ソーシャルサポートに関する項目の合計得点24点 ($M=18.71$, $SD=4.14$) のうち、14点未満を低サポート群、15点以上を高サポート群、そしてサポートを受けていない配偶者なし群の3群にわけ、養育スキルと心理的ストレス反応および問題行動傾向に関して群間比較を行った。母親の養育スキルに及ぼす影響

養育スキル尺度で測定した母親の「罰」スキルの使用について、配偶者から比較的高いソーシャルサポートを受けていると感じている母親群（サポート高群）、配偶者からあまりソーシャルサポートを受けていないと感じている母親群（サポート低群）、なんらかの事情により配偶者がいない群（配偶者なし群）の3群間で比較する一要因分散分析を行った。その結果、群間の主効果が有意であった ($F_{(2,706)}=6.80$, $p<.01$)。TukeyのHSD法による多重比較を行った結果、サポート低群とサポート高群の間の差 ($p<.01$)、および、サポート低群と配偶者なし群の間の差が有意であった ($p<.05$)。つまり、サポート高群や配偶者なし群に比べて、母親が配偶者からのソーシャルサポートを受けていないと感じている場合に、「罰」スキルの使用が高くなることが示された (Fig. 1-1. 参照)。配偶者がいても、その配偶者から十分なソーシャルサポートが得られないという事態は、母親へ大きな心理的な負担をもたらし、これが「罰」スキルの使用のきっかけを増やし、その習慣化を高めてしまっているのかもしれない。

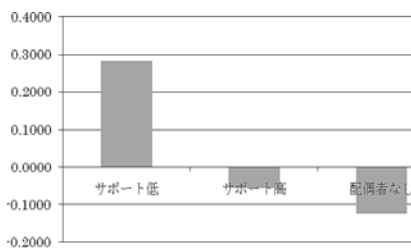


Fig. 1-1 罰スキルの使用 (Z得点)

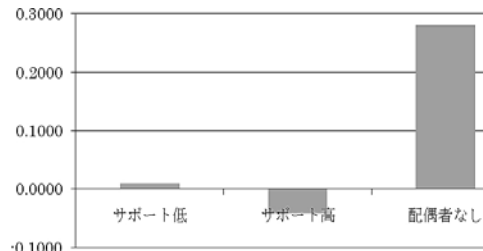


Fig. 1-2 一貫性のない養育スキルの使用 (Z得点)

母親の「一貫性のない養育」のスキルについて一要因分散分析を用いて3群間の比較を行ったところ、群間の主効果が有意であった ($F_{(2,706)}=3.17$, $p<.05$)。多重比較を行った結果、サポート高群と配偶者なし群の間の差が有意であった ($p<.05$)。配偶者がいない場合は、母親が配偶者からのソーシャルサポートを相対的に高く受けていると感じている場合に比べて、「一貫性の無い養育」スキルの使用が高くなることが示された (Fig.1-2.参照)。これは、配偶者がいないために、子どもの養育の負担が母親に集中しやすく、その過剰負担が養育の方針を変動しやすいものになっていること、また、養育の一貫性が変動し始めた際にそのことを指摘したり一貫性を保てるよう支えたりする存在がいないことがこの結果に影響しているものと考えられる。

母親の「援助的な言葉かけ」スキルについて一要因分散分析を用いて3群間の比較を行ったところ、群間の主効果が有意であった ($F_{(2,706)}=9.61$, $p<.001$)。多重比較を行った結果、サポート低群とサポート高群の間の差 ($p<.001$)、および、サポート高群と配偶者なし群の間の差が

有意であった ($p < .05$)。つまり、サポート低群や配偶者なし群に比べて、母親が配偶者からのソーシャルサポートを高く受けていると感じている場合に、「援助的な言葉かけ」スキルの使用が高くなることが示された (Fig.1-3.参照)。配偶者がいて、なおかつその配偶者から十分なソーシャルサポートが得られていると、母親は子どもに対しても援助的・支援的な行動を多くとることができるだろう。

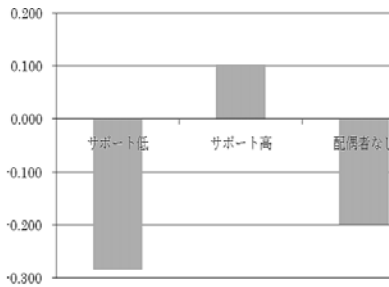


Fig.1-3 援助的な言葉かけスキルの使用 (Z得点)

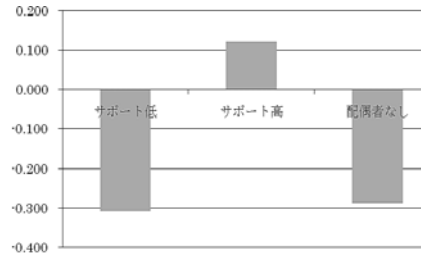


Fig. 1-4 コミュニケーションスキルの使用 (Z得点)

母親の「関心」スキルについて一要因分散分析を用いて3群間の比較を行ったところ、群間の主効果は有意ではなかった (n.s.)。

母親の「コミュニケーション」スキルについて一要因分散分析を用いて3群間の比較を行ったところ、群間の主効果が有意であった ($F_{(2,706)}=13.25, p < .0001$)。多重比較を行った結果、サポート低群とサポート高群の間の差 ($p < .0001$)、および、サポート高群と配偶者なし群の間の差が有意であった ($p < .01$)。つまり、母親の「援助的な言葉かけ」スキルと同じく、サポート低群や配偶者なし群に比べて、母親が配偶者からのソーシャルサポートを高く受けていると感じている場合に、「コミュニケーション」スキルの使用が高くなることが示された (Fig. 1-4.参照)。配偶者がいて、なおかつその配偶者から十分なソーシャルサポートが得られていると、母親は子どもに対しても援助的・支援的な行動を多くとることができるだろう。

母親の「制限」スキルについて一要因分散分析を用いて3群間の比較を行ったところ、群間の主効果が有意であった ($F_{(2,706)}=6.95, p < .001$)。多重比較を行った結果、サポート低群とサポート高群の間の差 ($p < .05$)、および、サポート高群と配偶者なし群の間の差が有意であった ($p < .01$)。つまり、母親の「援助的な言葉かけ」や「コミュニケーション」スキルと同じく、サポート低群や配偶者なし群に比べて、母親が配偶者からのソーシャルサポートを高く受けていると感じている場合に、「制限」スキルの使用が高くなることが示された (Fig. 1-5. 参照)。

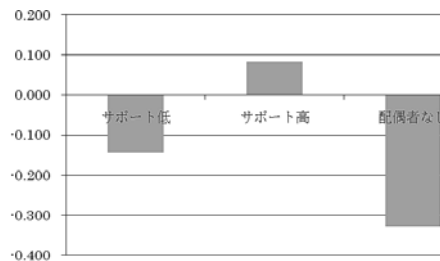


Fig.1-5 制限スキルの使用 (Z得点)

「罰」のスキルは、配偶者がいても十分なサポートを母親が感じられない場合に多くなり、他方、「一貫性のない養育」スキルは、配偶者がいない場合に高くなる。「罰」スキルと、「一貫性のない養育」のスキルは、いずれもネガティブな養育スキルであるが両者の相関は微弱で

ある(立元・坂田, 2008)。これら2つの養育スキル行動に対する配偶者からのサポートやその存在の影響が異なっていることは、これらの不適切なスキルの獲得や維持においてそれぞれに異なった背景が存在することが示唆される。

ポジティブな養育スキルである「援助的な言葉かけ」スキル、「コミュニケーション」スキル、「制限」スキルへの、配偶者からのサポートやその存在の影響のパターンは類似している。いずれも、配偶者からのサポートを比較的高く知覚している母親は、ポジティブな養育スキルを多く用いることができる。養育スキルを改善していくためには、配偶者からのサポートはやはり重要である。

母親のストレス症状に及ぼす影響

ストレス反応尺度で測定した母親の「抑うつ」の症状について、サポート高群、サポート低群、配偶者なし群の3群間で比較する一要因分散分析を行った。その結果、群間の主効果が有意であった ($F_{(2,706)}=37.06, p<.0001$)。多重比較を行った結果、サポート低群とサポート高群の間の差 ($p<.0001$)、および、サポート低群と配偶者なし群の間の差が有意であった ($p<.05$)。さらに、サポート高群と配偶者なし群の間の差が有意であった ($p<.01$)。つまり、配偶者がいても心理的サポートが期待できない場合には母親の「抑うつ」の症状が極めて高く、次いで配偶者なし群が「抑うつ」の症状が高く、配偶者からの心理的サポートが高いと感じている母親たちの「抑うつ」症状が最も低いという順序性が明確に示された (Fig. 2-1 参照)。

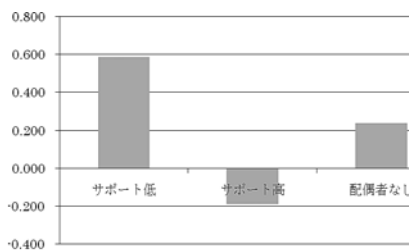


Fig. 2-1 抑うつの症状(Z得点)

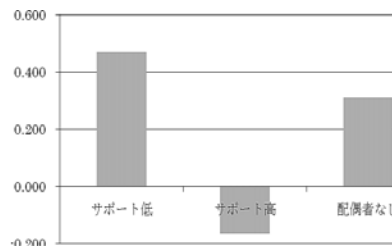


Fig. 2-2 不安の症状(Z得点)

ストレス反応尺度で測定した母親の「不安」の症状について、3群間の一要因分散分析を行った。その結果、群間の主効果が有意であった ($F_{(2,706)}=26.83, p<.0001$)。多重比較を行った結果、サポート低群とサポート高群の間の差 ($p<.0001$) が有意であった。さらに、サポート高群と配偶者なし群の間の差が有意であった ($p<.001$)。つまり、「不安」の症状に関しては、配偶者がいても心理的サポートが期待できない場合や、配偶者が存在しない場合には母親の「不安」の症状は、配偶者からの心理的サポートが高いと感じている母親たちに比べて明らかに高いことが示された (Fig. 2-2 参照)。

ストレス反応尺度で測定した母親の「不機嫌」の症状について、3群間の一要因分散分析を行った。その結果、群間の主効果が有意であった ($F_{(2,706)}=27.88, p<.0001$)。多重比較を行った結果、サポート低群とサポート高群の間の差 ($p<.0001$)、および配偶者なし群との間の差が有意であった ($p<.001$)。つまり、「不機嫌」の症状に関しては、配偶者がいても心理的サポートが期待できない場合は、配偶者からの心理的サポートが高いと感じられる母親や、配偶者が存在しない場合に比べて、母親の「不機嫌」の症状が高いことが示された (Fig. 2-3 参照)。

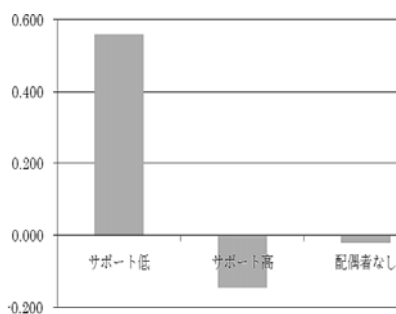


Fig.2-3 不機嫌の症状 (Z得点)

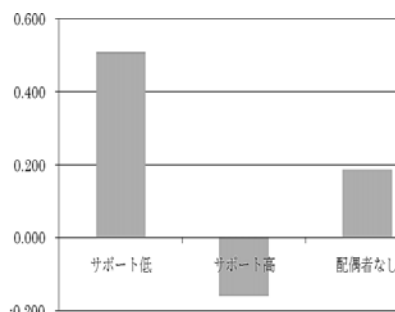


Fig.2-4 怒りの症状 (Z得点)

母親の「怒り」の症状について、3群間の一要因分散分析を行った。その結果、群間の主効果が有意であった ($F_{(2,706)}=26.66, p<.0001$)。多重比較を行った結果、サポート低群とサポート高群の間の差 ($p<.0001$) が有意であり、サポート低群と配偶者なし群との間の差に傾向がみられた ($p<.1$)。また、サポート高群と配偶者なし群との間の差が有意であった ($p<.05$)。つまり、「怒り」の症状に関しては、配偶者がいても心理的サポートが期待できない場合は、配偶者からの心理的サポートが高いと感じられる母親や、配偶者が存在しない場合に比べて、母親の「怒り」の症状が高いことが示された (Fig. 2-4 参照)。さらに、比較的高いサポートが得られていると感じている母親に比べて、配偶者のない母親のほうが「怒り」の症状が高いことが示された。

母親の「自信喪失」の症状について、3群間の一要因分散分析を行った。その結果、群間の主効果が有意であった ($F_{(2,706)}=12.63, p<.0001$)。多重比較を行った結果、サポート低群とサポート高群の間の差 ($p<.0001$) が有意であり、サポート低群と配偶者なし群との間の差が有意であった ($p<.05$)。つまり、「自信喪失」の症状に関しては、配偶者がいても心理的サポートが期待できない場合は、配偶者からの心理的サポートが高いと感じられる場合や、配偶者が存在しない場合に比べて、母親の「自信喪失」の症状が高いことが示された (Fig. 2-5 参照)。

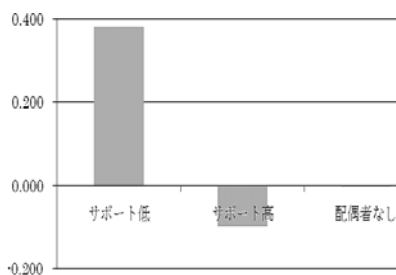


Fig.2-5 自信喪失 (Z得点)

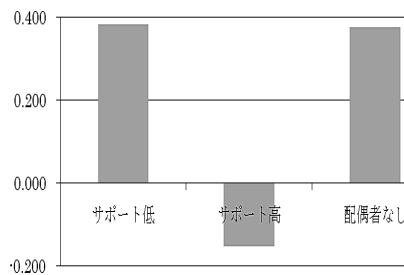


Fig.2-6 不信の症状 (Z得点)

母親の「不信」の症状について、3群間の一要因分散分析を行った。その結果、群間の主効果が有意であった ($F_{(2,706)}=21.69, p<.0001$)。多重比較を行った結果、サポート低群とサポート高群の間の差 ($p<.0001$) が有意であり、さらに、サポート高群と配偶者なし群との間の差が有意であった ($p<.0001$)。つまり、「不信」の症状に関しては、配偶者からの心理的サポートが

高いと感じられる母親は症状が最も少なく、配偶者がいても心理的サポートが期待できない場合や、配偶者が存在しない場合は、母親の「不信」の症状が高いことが示された (Fig. 2-6 参照)。

母親の「絶望」の症状について、3群間の一要因分散分析を行った。その結果、群間の主効果が有意であった ($F_{(2,706)}=25.82, p<.0001$)。多重比較を行った結果、サポート低群とサポート高群の間の差 ($p<.0001$) が有意であり、サポート低群と配偶者なし群との間の差に傾向がみられた ($p<.10$)。さらに、サポート高群と配偶者なし群との間の差が有意であった ($p<.05$)。つまり、「絶望」の症状は、配偶者がいても心理的サポートが期待できない場合が最も高く、次いで配偶者が存在しない場合が高く、配偶者からの心理的サポートが高いと感じられる母親の「絶望」の症状が最も低いことが示された (Fig. 2-7 参照)。

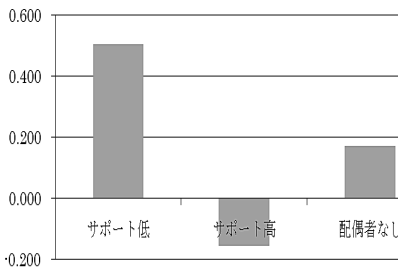


Fig.2-7 絶望の症状 (Z得点)

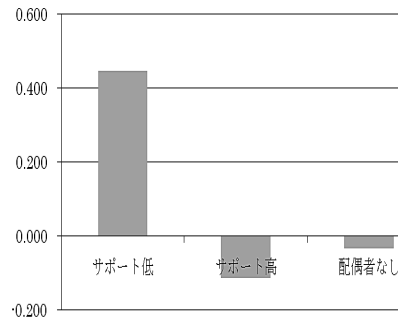


Fig.2-8 心配の症状 (Z得点)

母親の「心配」の症状について、3群間の一要因分散分析を行った。その結果、群間の主効果が有意であった ($F_{(2,706)}=17.27, p<.0001$)。多重比較を行った結果、サポート低群とサポート高群の間の差 ($p<.0001$) が有意であり、サポート低群と配偶者なし群との間の差もまた有意であった ($p<.01$)。つまり、「心配」の症状は、配偶者がいてもソーシャルサポートを与えられていると感じられない母親は、サポート高群や配偶者なし群に比べて明らかに症状が高いことが示された (Fig.2-8 参照)。

母親の「思考力低下」の症状について、3群間の一要因分散分析を行った。その結果、群間の主効果が有意であった ($F_{(2,706)}=11.93, p<.0001$)。多重比較を行った結果、サポート低群とサポート高群の間の差 ($p<.0001$) が有意であり、サポート低群と配偶者なし群との間の差もまた有意であった ($p<.05$)。つまり、「思考力低下」の症状は、配偶者がいても母親がソーシャルサポートを与えられていると感じられない場合に、サポート高群や配偶者なし群に比べて明らかに症状が高いことが示された (Fig. 2-9 参照)。

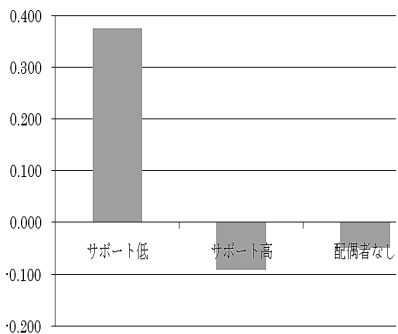


Fig. 2-9 思考力低下の症状 (Z得点)

母親の「非現実的願望」の症状について、3群間の一要因分散分析を行った。その結果、群間の主効果が有意であった ($F_{(2,706)}=23.05, p<.0001$)。多重比較を行った結果、サポート低群

サポート高群の間の差 ($p<.0001$) が有意であり、サポート低群と配偶者なし群との間の差もまた有意であった ($p<.05$)。つまり、「非現実的願望」の症状は、配偶者がいても母親がソーシャルサポートを与えられていると感じられない場合に、サポート高群や配偶者なし群に比べて明らかに症状が高いことが示された (Fig. 2-9 参照)。

とサポート高群との差 ($p<.0001$) が有意であり、サポート低群と配偶者なし群との間の差もまた有意であった ($p<.05$)。さらに、サポート高群と配偶者なし群との間の差もまた有意であった ($p<.05$)。つまり、「非現実的願望」の症状は、配偶者がいても母親がソーシャルサポートを与えられていると感じられない場合に最も高く、次いで配偶者がいない場合が高く、ある程度以上にサポートしてくれる配偶者がいる場合が最も低いことが明らかになった (Fig.2-10 参照)。

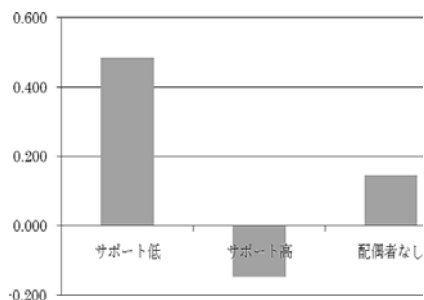


Fig. 2-10 非現実的願望 (Z得点)

母親の「無気力」の症状について、3群間の一要因分散分析を行った。その結果、群間の主効果が有意であった ($F_{(2,706)}=15.05$, $p<.0001$)。多重比較を行った結果、サポート低群とサポート高群との差 ($p<.0001$) が有意であった。さらに、サポート高群と配偶者なし群との間の差に傾向がみられた ($p<.10$)。つまり、「無気力」の症状においても、配偶者がいても母親がソーシャルサポートを与えられていると感じられない場合に最も高く、次いで配偶者がいない場合が高く、ある程度以上にサポートしてくれる配偶者がいる場合が最も低いことが示された (Fig.2-11 参照)。

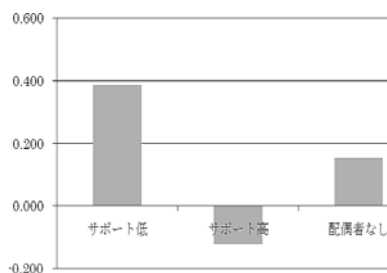


Fig. 2-11 無気力 (Z得点)

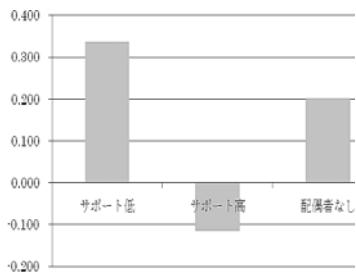


Fig. 2-12 引きこもりの症状 (Z得点)

母親の「引きこもり」の症状について、3群間の一要因分散分析を行った。その結果、群間の主効果が有意であった ($F_{(2,706)}=12.77$, $p<.0001$)。多重比較を行った結果、サポート低群とサポート高群との差 ($p<.0001$) が有意であった。さらに、サポート高群と配偶者なし群との間の差もまた有意であった ($p<.05$)。つまり、「引きこもり」の症状は、配偶者がいても母親がソーシャルサポートを与えられていると感じられない場合と配偶者がいない場合が高く、ある程度以上にサポートしてくれる配偶者がいる場合は低いことが示された (Fig.2-12 参照)

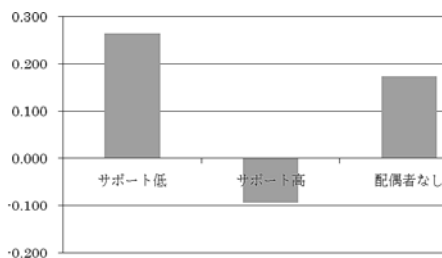


Fig. 2-13 焦燥の症状 (Z得点)

母親の「焦燥」の症状について、3群間の一要因分散分析を行った。その結果、群間の主効果が有意であった ($F_{(2,706)}=8.04$, $p<.001$)。多重

比較を行った結果、サポート低群とサポート高群の間の差 ($p < .001$) が有意であった。さらに、サポート高群と配偶者なし群との間の差に傾向がみられた ($p < .05$)。「焦燥」の症状は、「引きこもり」の症状と同じく、配偶者がいても母親がソーシャルサポートを与えられていると感じられない場合と配偶者がいない場合が高く、ある程度以上にサポートしてくれる配偶者がいる場合は低いことが示された (Fig. 2-13 参照)。

母親のストレス症状に及ぼす、配偶者からのサポートやその存在の影響の効果を比較検討すると、概して、配偶者がいても配偶者からのソーシャルサポートを得ていると感じていない母親のストレス症状が高い。13あるストレス反応の下位尺度のうち12で群間の主効果が有意であり、そのうち、「不機嫌」、「自信喪失」、「絶望」、「心配」、「思考力低下」においては、配偶者からのサポートが低い群が他の群に比べてストレス症状が高い。

また、「抑うつ」、「怒り」、「絶望」、「非現実的願望」、「無気力」の症状に関しては、サポートしてくれない配偶者が存在するよりもむしろ存在しないほうが、母親のストレス症状にとってはよいという結果が示されている。さらに、「不安」、「不信」、「引きこもり」、「焦燥」の症状に関しては、配偶者からのソーシャルサポートをある程度得られることが、これらの症状を軽減することが示された。

子どもの問題行動傾向に及ぼす影響

配偶者からのソーシャルサポートの提供についての母親の認知が、子どもの行動傾向にどのように影響を及ぼしているかを検討するために、金山ら (2006) の子どもの問題行動傾向尺度による外在化問題行動傾向得点と内在化問題行動傾向得点について、3群間の一要因分散分析を行った。その結果、子どもたちの外在化問題行動傾向については、群間の主効果が有意であった ($F_{(2,706)} = 13.09, p < .0001$)。多重比較を行った結果 (Fig. 3-1参照)、サポート低群と配偶者なし群の間の差 ($p < .001$) が有意であった。さらに、サポート高群と配偶者なし群との間の差もまた有意であった ($p < .0001$)。つまり、子どもの外在化問題行動傾向は、母親のサポートの知覚の高低に関わらず配偶者がいる場合よりも、配偶者がいない場合に外在的問題行動傾向が高くなることが示された。

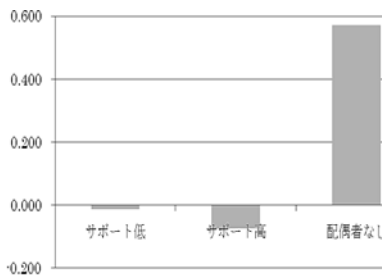


Fig. 3-1 外在化問題行動傾向 (Z得点)

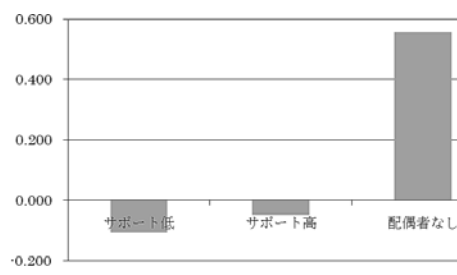


Fig. 3-2 内在化問題行動傾向 (Z得点)

内在化問題行動傾向についての一要因分散分析の結果、群間の主効果が有意であった ($F_{(2,706)} = 12.45, p < .001$)。多重比較を行った結果、サポート低群と配偶者なし群の間の差 ($p < .0001$) が有意であった。さらに、サポート高群と配偶者なし群との間の差もまた有意であった ($p < .0001$)。内在化問題行動傾向についても、母親のサポートの知覚の高低に関わらず配偶者がいる場合よりも、配偶者がいない場合に内在化問題行動傾向が高くなることが示された。

母親が知覚する父親からのソーシャルサポートの影響による違いによって、子どもの問題行動傾向、母親の養育スキル、母親のストレス反応の違いを比較すると、母親の罰スキルと外在的問題行動傾向、内在化問題行動傾向のいずれの問題行動傾向についても、子どもの問題行動傾向には、母親への配偶者からのソーシャルサポートはそれほど問題ではなく、配偶者がいないことの影響が大きかった。他方で、母親の養育スキルの中の罰スキルと母親のストレス反応は、多少のバリエーションはあるものの、配偶者の有無よりも、配偶者が十分にサポートしてくれていると感じているか、足りないと感じているかによって大きく異なる。さらに、「援助的な言葉かけスキル」、「コミュニケーションスキル」、「制限スキル」の3種類の母親のポジティブな養育スキルは、母親が配偶者からのソーシャルサポートを高く知覚している場合に高い。つまり、母親が配偶者からのソーシャルサポートをどのように知覚しているかによる影響のパターンとしては、母親の「罰スキル」と母親の各種のストレス反応、「一貫性のない養育スキル」と子どもの外在化問題行動傾向と内在化問題行動傾向、さらに、3種類のポジティブな養育スキルが存在する。

ここで考えなければならないのは、ペアレントトレーニング介入は何を優先的な目的にして行うべきであるのかという問題である。子どもの問題行動の予防や改善を優先的な目的とするならば、ソーシャルサポート獲得のための追加介入はあまり大きな意味をもたないことが予想される。子どもの予後に重点をおいて介入プログラムを設計する場合、母親の精神症状に対する介入は、必要に応じて採用する追加的・副次的な介入内容になる。

なお、本研究は、通常の幼稚園や保育所に通う子どもの母親や保育者からの情報に基づいた調査研究である。そのため、本研究における考察は、喫緊の介入を必要とするような問題をもつ臨床事例への介入について考察する際には注意が必要であるかもしれないことも付記しておかなければならない。

引用文献

- 久田 満, 千田茂博, 箕口雅博 (1989) 学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み (1). 日本社会心理学会第30回大会発表論文集, 143-144.
- 加藤恵子, 小林 真 母親の育児不安とソーシャルサポート 富山大学教育実践センター紀要 2, 45-50.
- 金山元春, 中台佐喜子, 磯部美良, 岡村寿代, 佐藤正二, 佐藤容子 (2006) 幼児の問題行動の個人差を測定するための保育者評定尺度の開発 パーソナリティ研究, 14(2) 235-237.
- 新名理恵, 坂田成輝, 矢富直美, 本間 昭 (1990) 心理的ストレス反応尺度の開発. 心身医学, 30, 1, 29-38.
- Plant K. M., & Sanders M. R. (2007) Reducing problem behavior during care-giving in families of preschool-aged children with developmental disabilities. *Research in Developmental Disabilities* 28, 362-385
- 佐藤容子, 立元 真, 坂田和子, 岡安孝弘, 佐藤正二 (2001) 幼児の母親の養育スキルに関する研究 (3): 親の養育スキルと子どもの社会的スキルとの関係 日本教育心理学会総会発表論文集 (43) pp. 521
- 高橋道子, 園田陽子 (2008) 育児への肯定的感情にソーシャルサポートが与える影響 東京・沖縄における調査 東京学芸大学紀要 総合教育科学系 59, 171-181.
- 立元 真, 坂田和子 (2008) 幼児をもつ母親の養育スキルとストレス反応. 乳幼児医学・心理学研究, 17(1) 83-91.